

ワーカーズ

http://www.workers-net.net/
mail workersnet@workers-net.net

毎月1日・15日 発行1部150円 半年2000円(郵送)
郵便振替 00180-4-169433 (ワーカーズ社)

2015/8/1 541・542 合併号

今号の内容

- ・「アベ70年談話」を封じ込めよう! ②③
- ・戦後七十年 戦時の記憶 ④⑤
- 母の物語り ④⑤
- ・コラムの窓・・・戦争体験の継承に思う ⑤
- ・エイジの沖繩通信 (NO・15) ⑥
- ・永遠の無関心 ⑦
- ・色鉛筆・・・微力ながらもがんばります。減少する組合員 ⑦
- ・戦後70年に思う ⑧
- ・「ジョン・ラーベ」南京のシンドラー」上映会 ⑧

安倍政権を総退陣に追い込もう!

戦争への道である安保関連法案を廃案に!

集団的自衛権行使を可能にする安保関連法案が、7月16日午後6時、衆議院本会議で自民、公明、次世代各党の賛成多数で可決され、衆院を通過しました。

審議継続を求める民主、維新、共産など野党5党は採決を退席しました。

安保関連法案は、自衛隊法や武力攻撃事態法など改正10法案を束ねた「平和安全法制整備法案」と、国際紛争に対処する他国軍を後方支援するため、自衛隊の海外派遣を随時可能にする新法「国際平和支援法案」の2本立てです。

民主党の岡田克也代表は反対討論で「強行採決は戦後民主主義の大きな汚点になる。集団的自衛権の行使を認めるという憲法改正に匹敵するような憲法解釈の変更だ」と指摘しました。

野党は採決を前に退席しました。

5月26日に始まった審議では、集団的自衛権の行使の是非や憲法との整合性、他国軍の後方支援をどこまで認めるかなどを巡り、与野党が激しい論争を続けました。与党は一時、維新との間で法案修正も探ったが実現しませんでした。

現しませんでした。与党は法案が参院に送付された後、6月10日たつても法案を議決しない場合、否決したとみなして衆院の3分の2以上の賛成で再可決できる「60日ルール」の活用も視野に入れています。

安保関連法案が16日に衆院を通過したことで、9月14日から同ルールを適用できま

す。舞台は、参院に移りますが、野党はこの法案の問題点を徹底的に突くべきです。

そもそも、集団的自衛権の行使は憲法に違反しているのは明らかです。安倍政権は、集団的自衛権を行使しなければ憲法を改正しなければなりません。違憲の法案は、いくら審議しても皆の理解は深まりません。

7月17、18日に行なった毎日新聞の世論調査によると、安倍内閣を支持35%、不支持51%です。安保関連法案に賛成27%、反対62%、でした。安保関連法案を廃案に追い込むためには、安倍内閣の支持率を大幅に下げることが大切です。

安保関連法案に反対する市民集会が7月24日夜、東京・日比谷野外大音楽堂で開かれ、3000人を超える参加者(主催した「安倍政権NO! ☆実行委員会」発表)が、

一斉に「安倍政権NO!」と書かれたプラカードを掲げました。午後6時半から始まった集会には、安倍法案のほか、原発再稼働や沖繩・辺野古新基地建設などに反対する団体が参加、安保関連法案を「違憲」と批判している小林節・慶応義塾大学名誉教授(憲法)

が登壇し、「安倍政権は憲法を破ってアメリカの2軍になろうとしている。数年後の衆院選まで、細く長く、怒りを保って、政権交代しないと終わらない」と主張しました。精神科医の香山リカさんも「平和のためには戦争しても良いという(安倍政権の)

案に追い込みましょう。(河野) 考えは間違っている。「安倍政権は権力に酪酊しているのではないかと述べた。安保法案に反対する10代・20代の学生団体「SEALDs(シールズ)」の元山仁士郎さんは「変えたいと思うなら、安倍政権NOを言い続けなければいけない」と訴えました。こうした集会をあちこちで行って行くことが必要です。



7月24日安保関連法案に反対する国会前デモ

アベ戦争法案の参議院での審議が始まる。その法案がとても危険な意味合いを持つのは、単にその法案によって日本が武力行使＝戦争ができるようになるだけではないからだ。安倍首相自身の歴史認識とあわせ、日本を再び戦争国家へと大きく転換するターニングポイントになりかねないところに、今回の法改正の危険性が潜んでいるのだ。その一端が示されると見られているのが「アベ70年談話」だ。

8月中旬にも出されるといふその「アベ談話」。これまでも内外からの批判に晒され、若干後退する感も垣間見える。これまでも増して、談話への包囲網を拡げ、安倍首相の思惑を封じ込めなければならぬ。

◆野望

安倍首相が戦後70年目の区切りの今年夏に出すとしてきた「アベ談話」の時期が近づいてきた。その談話がアジアだけでなく西欧まで含めて大きな関心を集めてきたのは理由がある。それは第一次安倍政権の発足時から掲げてきた「戦後レジームからの脱却」という旗印が、これまで積み上げてきた戦後日本が辿ってきた歩みそのものの転換を意図しているのではないか、という疑問からだった。

周知のように、95年に出された村山談話は、あの大戦での「植民地支配」と「侵略」に対して「痛切な反省」と「心からのお詫び」を表明していた。冷戦構造の崩壊によって、アジアや極東諸国間の関係が復

構造がしだいに緊迫化するなかで、日本をソソク包囲網に組み込むために日本の再軍備化を進め、また、戦争指導者の公職復帰なども進めた。米国は、集団的自衛権の行使容認など、米国の世界戦略に沿った道を進んでいるかぎり、日本の政権を支持してきた。が、日本の戦前への復古傾向や対米自立化と自主防衛への思惑に対しては、警戒感が強い。だから米国でさえ、安倍首相の歴史修正主義は許せない裏切りと写っている。それはそうだろう。押しつけ憲法論や靖国参拝などは、米国による占領政策と戦後の対日政策と真っ向から衝突するからだ。それを許せば、東京大空襲や広島・長崎への原爆投下に対する正統性などが、次々と矢面に立たされることになる。ひいては米国による占領統治、戦後の対日政策すべて否定される事態になりかねない。戦後レジームからの脱却は、傲慢な米国からすれば「飼い犬に手をかまれる」ような意味合いも含まれているのだ。

そんな米国は、安倍談話がどんな内容になるか、様々な圧力を加えながら警戒感を持ってみている、ということだろう。

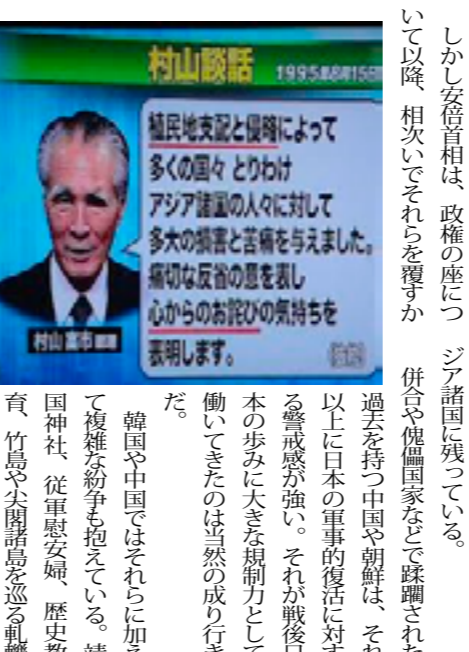
◆本音

アベ談話がどのような内容で出されるのか、いまから想像してもあまり意味はないが、それでもある程度

参考意見だという。消費増税や戦争法案でも同じような検討機関をつくったが、結局、それは参考程度、単なるアリバイづくりに終わっている。今回も広く意見を聞いたという通過儀礼でしかなく、その議論も含めて、世論の動向や諸外国の反応を推し量ってきたのだろう。

◆包囲網

安倍70年談話は、当初国内よりも海外から、しかも日本から遠いヨーロッパや米国からの疑念や警戒感呼び起こした。それは日本が敗戦国から立ち上がって経済大国となった、平和国家としての戦後の歩みを根本的に転換するのではないか、というものだった。すでに世界有数の軍事大国になっていたにも関わらず、表向きは、海外では武力行使せず、戦争に突き進んだ過去を反省する姿勢を示してきたからだ。



しかし安倍首相は、政権の座について以降、相次いでそれらを覆すか

めていても、日本側からすればそうではなかった、と言いたいのだろう。実際、安倍首相のお友達でもある北岡伸一氏(5月30日、朝日)も、満州事変やその後の満州国の創設だけみれば、明らかに侵略戦争だったとし、それ以降の日中戦争や対米戦争については言及を避けている。その言葉を裏返せば、日中戦争や対米戦争は侵略戦争ではなかった、それは米国による石油禁輸などによる日本の「存立危機」から日本を守る「自存自衛」の「強いられた戦争」だった、ということにでもなるのだろう。

また有識者懇でた意見として、「国策を誤った」ことに対し、「戦争に負けたんだから戦略的に大失敗であり、国策を誤ったという言葉でよい」(7月22日、朝日)という意見もあつたという。戦争に負けたから、だということ、戦争に勝てば国策の誤りではない、ということになりかねない。安倍首相が集めた有識者懇では、実に「こういいうい加減な意見が交わされているのだ。」

◆反省

戦後日本の軍事的復活を阻止してきた三つ目は、日本の民衆自身による、「二度と戦争はしてはならない」というあの戦争への痛切な反省と後悔の念だ。



のような言動を繰り返してきた。そして今回の「談話」だ。仮にそれがあの大戦への反省や謝罪の姿勢を投げ捨てるような内容になれば、誰が見ても戦後日本の歩みを根本から転換させるものに写るのは当たり前のことだろう。

◆飼い犬

アベ談話は、日本が戦争もする軍事大国になることを阻んできた包囲網への挑戦でもある。戦後日本の平和主義を支えていたもの、それはアジア諸国民の警戒感、米国の監視、それに日本の人々の戦争忌避の決意、この三つが大きい。

南シナ海の周辺国では、昨今の中国の伸張などで対中警戒感が高まり、軍事的なバランスも踏まえて日本の軍事的な期待する面もある。しかし、当たり前の話だが、戦争によって多くの犠牲者を出した地域をはじめとして、日本軍による占領に対する反感や忌避感、広くアジア諸国に残っている。併合や傀儡国家などで蹂躪された過去を持つ中国や朝鮮は、それ以上に日本の軍事的復活に対する警戒感が強い。それが戦後日本の歩みに大きな規制力として働いてきたのは当然の成り行きだ。

韓国や中国ではそれらに加え、複雑な紛争を抱えている。靖国神社、従軍慰安婦、歴史教育、竹島や尖閣諸島を巡る軋轢

いはば非戦・平和への願いだ。それが「占領憲法」と保守や右翼から批判されながらも、自分たちの気持ちや願いにフィットした憲法を保持してきたのは、そうした反省を支えられたものだった。ただし戦後日本の再出発にあつては、不十分な点も多い。なかでも戦争責任を免れない天皇及び天皇制を政治の世界から排除できなかったこと、それに戦争指導者たちを自分たちによって告発、追求、裁けなかったことだ。

日本では、戦争指導者として巣鴨刑務所に収斂された岸元首相が公職復活したのは、その最たる現れだった。その他に公職追放から政界や官界、経界に復帰した戦争加担者も多い。こうした日本の現実、ドイツがあのヒットラーのナチスを戦後長きにわたって追求し続けたのとは正反対だった。日本では、戦前の支配層が、ほぼそのまま戦後の支配層

◆主役

その安倍首相による「戦後70年談話」。当初の閣議決定を経た、首相談話から、閣議決定抜きの、首相の談話に格下げされたという。とはいっても国際的にみれば同じ「首相ステートメント」だ。これも外野の「騒声」にかまわず自身の思

母の物語り

今九十歳の母。この十年は重度の認知症にかかっています。現在では老人ホームで生活をしています。戦争体験者が少なくなるなか、少しでも当時の体験者の気持ちと言葉を伝えたいと思い、過去数十年の間に断片的に母に聞かされた戦時の話を記してみます。

■仙台空襲

現在の三陸町生まれ育ちの母が仙台に来たのは、女学校の入学の時でした。家族全員で、移り住んだそうです。三陸町は、今回の東日本大震災で壊滅的打撃を受けています。今でも、「かさ上げ工事」という果てしない土木工事が続いています。

戦後七十年 戦時の記憶



空襲後の仙台の街

実家は、志津川湾から五十メートル程度内陸の場所、ほとんど海の近くですから、当時も三陸沖津波などの恐怖の体験をしてきたよう出ず。

本題ですが、終戦の年となる昭和二十一年に仙台も激しい空襲にあいました。「ヒューヒュー」と音がして、焼夷弾が雨のように降ってきた。仙台の家は駅から徒歩でも五分程度の都心部。そうでなくとも帝国軍隊の第二師団がおかれていた仙台は、連合国の主要な標的であったと思います。第二人を連れて北の東照宮の森に駆け込んだそうです。「さらに光るB29(米国爆撃機)」これは母から聞いた恐怖の言葉でした。都心部が真っ赤に燃えているのが見えた。生々しい話は戦後生まれの私にも強い印象を残しています。ところで、都心部が焼け野が原に

なったのにこの木造の実家は偶然にも焼け残り、戦後私はここで生まれることになりました。

■戦時動員

母は戦後も、家事手伝いや主婦業オンリーで、社会で働いたことがありませんでした。ただ例外が、戦時動員で、工場で数か月働いていたのです。県立女学校在学中だった母は、そのために勤労動員の期間はかなり少なかったらしいのです。

また、母はこの工場での話は、不思議に懐かしそうに話しており、子供の私としてはあまり記憶に残るものではありませんでした。工場の担当者たちの勤労指導は意外に親切で過酷なものではなかったようです。

■「朝鮮人強制労働」

世界遺産登録問題で、「軍艦島」などの日本産業革命遺産の強制労働が注目を集めました。しかし、その

とき思い出したのも母の言葉でした。「仙山線(仙台から奥羽山脈を越えて山形市に至る国鉄線路)の工事はこのほか難工事だった、あそこは枕木の数ほど人が死んでいるらしい。その多くは朝鮮から連れてこられた朝鮮人だった」と。私自身まだ小学校当時のことでその意味を十分理解できなかったと思います。でも、とんでもない不条理なことが戦時中に行われてきたことは感じていました。

もつとも、この話は母だけではなく、仙台の地元では当時の人たちはだいたいの口コミで知っていたようです。もちろんこのような問題に政府や行政が解明に取り組んだということは一切ないようです。そればかりか、韓国政府ですら、近年「慰安婦」「強制労働」が表ざたになった時に騒いでいる割には、どうして日本政府にもつと一貫して調査を要求しないのでしょうか。戦後70年になるのに李承晩、朴正熙、など韓国独立初期の政権が日本に責任追求しなかったことはかなり問題ではないかと思えます。

■河原で米軍機の機銃掃射を受ける

敗戦直後、占領軍は第二師団のある仙台をやはり拠点として、かなりの兵力を駐屯させていました。戦後私が、三ないし五歳の時点で米兵は、まだたくさんいましたが、自身は米兵の暴行などの不法行為を聞いたことはありませんでした。しかし、母の話では、進駐軍の来たばかりの当時は、怖いこともあった。母が、終戦直後広瀬川の河原で友達と遊んでいた時、接近してきた航空機にいきなり機銃掃射を受けた。とつさに河原の茂みに逃げ込んで助かったこと聞いたことがありません。

本土での戦闘がなかったということにはなっていますが、米軍もそうとう神経質になって進駐してきたと思われ、一触即発の事態があったことをうかがわせる一件でした。

■「かわいそうな女子挺身隊」 大人(たいじ)の国中国

何度も聞かされたのが、この「女子挺身隊」の話でした。現在では、



「従軍慰安婦」と「女子挺身隊」は区別されています。当時の母には、そんなことはもちろんわからない話でした。

母の話では「女子挺身隊には多くの中国人や朝鮮人がいた、大陸などで兵隊さんの相手をさせられた、かわいそうな人たち」だ。こんな話を聞いたのが私が小学生から中学生の頃だと思えます。

少なくとも、小学当時は普通に愛国少年で「太平洋戦争は負けたが、日本はアジア人としてよく頑張った」「さすが日本は誇れる国」程度の精神構造でした。母の「女子挺身隊」の話は、かなりショックでした。

現在から考えれば、平凡な主婦である母が「従軍慰安婦」の存在をだいたいの口コミで知っていたことは、多くの日本人も、おそらく中国・韓国

人もそしてこれらの政府もこの事実を少なくとも知っていたでしょう。戦後の対応が遅すぎます。これらの政府は、マスコミなどで取り上げられて初めて、言い訳したり自国民をたきつけるために政治利用しているだけです。

また私が中高生ぐらいの時だと聞きます。中国残留孤児の「里帰り」のさいも、母はその苦界に同情していましたね。それとともに印象に残った言葉は「日本は中国にあんなにひどいことをしたのに、中国人は日本人の子供を殺さずに育ててきた」と涙ぐんでいました。そして「中国は大人の国だね、心が広い」とも。

■スターリンとトロツキー

これは、付録の話となります。学生時代に、夏などに帰省して政治の話などしたとき記憶に残ったことは、母がトロツキーのことについて意外に知っていたことでした。もちろんレーニンやスターリンのことも。

とはいえ、母は彼らの著作など読むわけもなく、ただ同時代人として情報に接していたのでしょう。現在の子どもたちが、米国のオバマやロシアのプーチンを知っているように。「トロツキーは、才能あふれる人だが、意志の弱い人でもあり、そのためスターリンに負けてしまった」と

というのが母の結論でした。

■祖父「満州、朝鮮樺太、台湾もつたいなかった」

母の話からそれますが、その父(私の祖父)のはなしもとても印象的なものがありました。彼の戦前の大日本帝國的思考を今でも記憶しています。

それが、「満州、朝鮮樺太、台湾(戦争で負けてしまった喪失)もつたいなかった」と。それはやはり私が小学生の上級生か中学ぐらいのことでした。なにか政治の話をしていった時、祖父が地球儀を手に取り満州、台湾、朝鮮、樺太を指でさしながら、そんなことを言うのです。

祖父は旧制中学では優等生で生徒会長だったとか。ところが体格が貧弱で、兵隊検査では内種不合格だったそうです。だから、戦争が激化しても、最後まで兵隊にとられることはありませんでした。戦地での戦争体験はありません。それゆえ言えるのでしょうか、「もつたいなかった」なんて。さすがに私も、戦後の平和と民主主義教育を受けてきましたので、その時とても呆れたものです。

戦前の人でも、戦争体験の受け取りは多様でしょう。その立場や、経験の内容にもよるわけです。しかし、両面からのあらためてこの当時の時代を考察してみる意味はあるだろうと思えます。(文)

戦争体験の継承に思う



「戦争」を知らない若い世代にどう語り継いでいくのか。今私たちは大きな課題を突きつけられている。と同時に、自由な発表、



1945年4月1日 米軍が沖繩本島に上陸ひめゆり平和祈念資料館 館長 島袋淑子さん 17歳の時に学徒として動員される。戦後資料館づくりに携わり語り部として体験を伝えてきた。



広島平和文化センター 被爆体験証言者である梶本 淑子さん。

沖縄県と安倍政権、埋め立て工事実施をめぐり全面衝突か！

県の有識者委員会、辺野古承認「瑕疵あり」と報告

防衛省、地質調査終え埋め立て実施設計文書を県に提出

7月16日、翁長雄志知事が設置した第三者有識者委員会が約5カ月の審査を経て、仲井真前知事による名護市辺野古の埋め立て承認に「法的な瑕疵が認められる」との検証結果を答申した。

県民の関心が高いなどとして全文公開を求める報道陣に対し、翁長知事は「まだ私たちも精査していない。数字や事実関係に間違いがないか顧問弁護士にも見てもらう。精査後の公開で、県民、国民に理解してもらえらると思う」と、精査が終わるまで公開しない方針を示した。

この「第三者委員会の報告書」骨子は次のような内容である。★「生物多様性」

エイジの沖縄通信 <NO. 15>



有識者委が報告書 知事、8月取り消しへ



こうした状況を判断すると、翁長知事は「8月下旬にも取り消しの方角性を固め、手続上必要な沖縄防衛局への聴聞を経て、9月中に取り消しに踏み切る公算が大きい」と言われてきた。



「県との事前協議が整えば、すでにボーリング調査が終わった浅瀬部分から工事に着手する構えだ」と指摘している(琉球新報、7月25日付)。

永遠の無関心

無知蒙昧の放言で名を馳せた作家が物した「永遠の○○」、ベストセラードラマだったが、作家への共感が持たないで読む気もしない。敗戦この方の多数派市民の意識を表す言葉は何か。私が思いついたのは、「永遠の無関心」という言葉だ。

百田某らにとっては、天皇の名の下に尊い命を捧げた皇軍兵士、英霊なるものへの顕彰こそが戦後を覆う意識なのだろう。しかし、皇軍兵士は兵站なき戦線において病み、飢えて多くが死亡した。特攻は無駄な死を強いられただけであり、その美化は罪悪ですらある。

7月24日の「中日新聞」が1面トップで「飢え、衰弱7割病死」を報じている。同紙が厚生労働省の資料を分析した結果、陸軍のフィリピン戦没者の病死率が1945年初め

は14%前後だったが、その後徐々に増加して敗戦直後の9月には77%に上ったというもの。

「死因はマラリアや栄養失調、脚気などが大半。補給が途切れ、極端な食糧不足の中、広い意味での餓死者が多数いたとみられる。同省などによれば、兵士がなぜ死んだのか戦争全体の統計はない。資料からは、兵士の命が軽んじられた70年前の現実の一端が浮かび上がる」(同紙)

この国の歴史には、歴史にあらぬなものか書き連ねられてきた。あったことはなかったこと、され、ありもしないことがあったこと、にされている。それは、8・15を前後していかなる断絶もなく、支配層は支配者としてそのまま生き残り、人々の力でそれまでの権力が覆され、秩序が破壊されることはなかった。

こうした成り行きを許したのは人々の無関心ではなかったか。長き



三菱マテリアル 戦後補償、第2次大戦中の中国人強制連行をめぐる損害賠償などの訴状提出前、公園に集まった生存者(前列左端と2人目)と遺族ら2014年4月、中国河北省石家庄市

「1972年」

性おきなわ戦略」など法律に基づく計画に違反している可能性が高い」などと指摘し、公有水面埋立法に照らして承認には法的な欠陥があったと結論付けている。

報告書を受け取った翁長知事は「埋め立て承認の取り消しも含めど、どのように対応することが効果的なのか慎重に検討したい」と述べ、取り消しの判断時期については「工事が次の段階に入ろうとすることなどを横目でにらみながら、相手があることなので言えない」との慎重な言い回しをした。

関係者によると、沖縄防衛局は現在の本体工事前のボーリング調査が海上の抗議船やカヌー隊の抗議活動、台風の影響などで大幅に遅れていること。防衛省も本体工事を夏ごろに始めたいとしているが、ボーリング調査の完了期限を9月末に延長したこと。また、着工前に行う県との実施設計協議も控えているとのこと。

こうした状況を判断すると、翁長知事は「8月下旬にも取り消しの方角性を固め、手続上必要な沖縄防衛局への聴聞を経て、9月中に取り消しに踏み切る公算が大きい」と言われてきた。

ところが、防衛省は24日、辺野古では海底などの地質を確認するボーリング調査が終了していないのに、埋め立て工事に向けた実施設計文書(護岸を建設する位置を示した

図面)をもう県側に提出したのである。今進んでいる辺野古でのボーリング調査は9月末までに24か所で行う予定だが、現段階で終了したのは19か所、まだ5か所も調査が終了していない。残りの5か所は調査が終了したところで図面を追加提出すると言っている。

ボーリング調査が終わるその調査結果も出ていない。これでは一体何のためのボーリング調査なのか。これでは、ただやればよいだけの形式的なボーリング調査と言えよう。

実際に埋め立て工事に着手するには、仲井真前知事が承認に当たって県が付した留意事項「工事の実施設計につき事前に県と協議を行うこと」が必要なのだ。だが、中谷元防衛相らは、設計文書を提出したこと自体が協議の一環であるとして開き直り。防衛省は「8月14日を期限に県からの質問を受け付ける」というような横柄さで、協議が不調に終われば埋め立て工事に入る構えを示している。

「関係者によると、和解合意案で三菱側は第2次大戦中、日本政府の閣議決定に基づき、日本に強制連行された中国人労働者約3万9千人のうち3765人を三菱マテリアルの前

身企業とその下請け会社の事業所に受け入れ、労働を強いたことで『人権が侵害された歴史的事実』を認めたい」「その上で、被害者や遺族に『適切な反省』と『深甚なる謝罪』を表明」(同紙)

辺見庸は「週刊金曜日」に連載中の「1★9★3★7」において、

「『時間』はなぜ消されたのか」問いつけている。駅であれこれのピラをまきつけていて私は、無関心を装って通り過ぎる人々に時に溺れそうになることがあるが、盛夏に向かうなかでも挫けずにピラをまきつけようと思う。無関心の罠にはまるのは悔しいから。(折口晴夫)

微力ながらがんばります。減少する組員

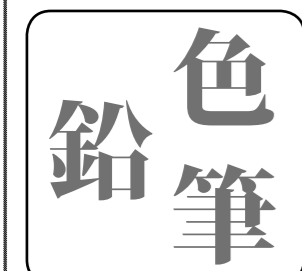
私が支援学校の組員になって二十三年になります。最初は、私の周りは、ほとんどの人が組員でした。その仲間たちと勉強会をしたりしながら、特別支援教育について学んできました。また、子どもたちにとって自立を目指すために必要なことでございやすい設備について、また働く権利についても、県交渉などをつうじみながらがんばってきました。しかし、号俸の改

正と職員評価が入ってきた頃から、組合を辞めていく人が増えました。昔、自閉症のことを教えてくれたあの先生は組合の集まりで姿を見かけなくなつたなど思っている、教頭先生になつていました。毎年のペースアップが職員評価で決まります。昔の一号俸が十段階に分けられました。普通だと今は四号俸しか上がりません。ものすごくいい評価を受けても、昔の一号俸分の給料は上がりません。でも、みんな歯をくいしばってがんばって働いています。

職場では、組員は私一人です。署名をお願いすると、以外と多くの方が書いてくれます。校長で退職して新人の指導員としてきていたある先生は、署名が一杯書ききれなくなったのに、欄外に書いてくれました。ものすごく、嬉しかったです。

最近アンケート調査を実施しました。するとものすごく多くの悩みや意見が寄せられました。アンケートを締め切っても、次から次へと私の

ところで届きます。また、相手は自分の名前を私に明かしている人もいます。多かつた内容は長時間労働、過密労働、パワハラ、施設設備の老朽化や不足、職員間の人間関係等でした。びつくりするとともに、この心の叫びを無にしてはいけなさと強く思いました。そうです、誰だって評価が下がったり、給料が下がるのはいやです。でも組合に期待している人が多くいるのです。私も不安でこわいですが、組合員の使命を果たしたい、私を信頼して書いてくれた人の気持ちを無駄にしないように、しなやかな心をもつて広い視野を養いながら、微力ながら頑張りたいと思っています。(弥生)



戦後70年に思う

この機会に、自分のこれまでの人生を振り返って、みたいと思う。

東京オリンピックが開かれた年は、10歳で小学校4年生だった。聖火ランナーが近くの国道2号線を走るので、近所の子どもらで見たことを見ていた。

大阪万国博覧会では太陽の塔を見上げ、学校行事で行った中学3年生のクラス仲間と各国のイベント会場を見学した。

高校は商業高校に入学し、入ってもなく5月だったと思うが、部落問題解放研究会の招集で生徒総会が開かれた。全校生徒と教師が講堂に集まり、糾弾会が始まった。部落差別発言をした年配の男性教師は、発言した内容で厳しく糾弾され、私たちが新人生は初めての体験に驚き、率直に部落研の人が怖かった。社会問題として部落差別を受け止めるには、まだまだ理解不足で時間が必要な環境の中に置かれていた、と思う。

そして、20代半ばに安保闘争を経験された方に出会う機会があった。それは、共同保育の仲間で、芦屋にある産婦人科の就職面接で差別を受けたFさんの差別撤回闘争だった。Fさんは、結婚して被差別部落に住み生後1歳に満たない男の子の母親だった。闘争の支援者は、共同保育の子連れの仲間が中心となり、

その闘争に支援者として駆けつけて来られたKさんが、安保闘争で被害にあった樺美智子さんと高校時代の親友だった。Kさんは常にもの静かで相手に対し感情的にならず、説得を試みる冷静な女性だった。親友の死はKさんにとっては、権力者との向き合う時の自らの姿勢を省みる原点となつているのだと思う。

地域の合同労組が主体となつて闘った。

その年の6月15日は、樺美智子さんを偲ぶ集いを企画し、Kさんからお話を聞いた。Kさんから天國の樺さんに向けての手紙が読まれ、安保闘争が闘われた意義を教わった。当時、安保闘争は割烹着を着た主婦の列、産業別組合の列など、ほとんどの市民が何らかの形で参加できる環境があつたことを写真が語つていた。

戦後70年の今、更に深刻な安保法案が出てきているのに、労働者らの怒りはどうなっているのか？ 怒りを表現する場所なら、組合が無くても街角で、各種集会で自分の意思表示をできる場があることを知ってほしい。その兆しは、私たちの駅頭のアピールに、メールを見ての個人参加者があつたことが証明している。

みんなで行動すれば、元気も出ることは間違いない。合言葉は「安倍政治を許さない！」

(折口恵子)

南京事件を描いた「ジョン・ラーベ」南京のミッドラー」上映会



香川照之、ARATA、柄本明など日本を代表する役者が参加した本作が日本未公開。
南京事件70周年(2007年)に合わせて、世界中では南京事件に関する映画作品が多く作られました。しかし、日本ではそのほとんどが一般公開されていません。私たちが南京・史実を守る映画界(実行委員会)では、日本で上映されることになった「南京事件」映画の上映を敢行してきましたが、今年、5年に渡る交渉の結果、本作品の上映にたどり着くことが出来ました。世界中で認められた映画が上映できない、そんなことはあってはならない。そういう案件かつ誇り高い思いが、私たちの原点です。

2015年9/11(金) 14:00・19:00

藤沢市民会館(小ホール)(藤沢駅南口下車徒歩10分)

料金:1000円 *大学生・障がいのある方は500円、18歳未満無料(予約前売りも同料金、電話予約受付可)

主催:映画「ジョン・ラーベ」上映神奈川実行委員会

*申し込み・問い合わせ 090-7405-4276・090-5416-3843・090-8046-0925

配給:南京・史実を守る映画祭実行委員会

【後援】ドイツ連邦共和国大使館・神奈川新聞社・東京新聞横浜支局・読売新聞横浜支局

【上映協力団体】

すこやか広場、みんなの広場、NPO法人あんしんネット、横浜南部九条の会、ABC企画、毒ガス問題を考える会、化学兵器被害解決ネットワーク、歴史を学ぶ市民の会・神奈川、ユフの会、ミノリ堂、神奈川平和遺族会、横浜西口読書会、かながわ平和憲法を守る会、小川町企画、本郷文化フォーラムワーカースクール(HOWS)、神奈川平和運動センター、自治労神奈川県本部、一般社団法人神奈川人権センター、「輝け!九条」新横浜市民の会・神奈川、国民連合・神奈川、かながわ歴史教育を考える市民の会、戦争をさせない100人委員会戸塚・栄・泉、湘南護憲市民の会、フォーラム21湘南、11(イレブ)の会、平和の白いボン行動・藤沢、憲法を活かす会藤沢・寒川、イマジン湘南、神奈川ネットワーク運動・藤沢、プロジェクト猪、子ども・教育・くらしを守る横浜教職員会、横須賀の学校教職員・子どもを守りたい、神奈川県商工団体連合会、湘南護憲市民の会、戦争屋にだまされない厭戦隊市民の会、ストップ秘密保護法かながわ、神奈川県教職員組合、社堂文化・九条の会、武田問題対策連絡会、WE21ジャパン藤沢、藤沢・九条の会、横浜子どもを守る会、横浜市教職員組合、厚木基地を考える会、横浜学校労働者組合、環瀨門、みんなの教育・ふじさわネット、大会・九条の会、年金者組合藤沢支部、ワーカース、神奈川県平和委員会、週刊金曜日を応援する会・神奈川、神奈川のうたごえ協議会、政治を変える市民フォーラム、日本中国友好協会神奈川県連合会、オルタナティブ神奈川、湘南教職員組合、神奈川県高等学校教職員組合、時を見つめる会、チームみつばち、ピンスカフェチがさき、神奈川県労働組合総連合、がくろう神奈川、神奈川県労働組合共闘会議、ふえみん婦人民主クラブ・横浜支部、神奈川県年金者組合、横浜市従業員労働組合、九条の会・ちがさき、あばばの木、新日本婦人の会神奈川県本部、湘南ユニオン、厚木基地爆音防止期成同盟(順不同、6月25日現在)

